

## 優勝・まちづくり委員長特別賞 舞鶴工業高等専門学校 機能が融解し人、町、日常に浸透する地区センター



舞鶴工業高等専門学校は、1965(昭和40)年に京都府舞鶴市の現在地に、機械工学科2学級、電気工学科1学級をもつ国立高等専門学校として開校した。その後1970(昭和45)年に土木工学科1学級を増設、1994(平成6)年に現在の建設システム工学科に改組された。4年次に履修コースとして選択する「建築コース」と「都市環境コース」が導入されたのは2006(平成18)年で、3年生までは建築・土木を総合的に学習し、4年次以降も完全に分離しないで教育していくのも舞鶴高専の特長の一つだ。創立から50有余年の間に多くの優秀な実践的・創造的技術者を育成し、昨年度の有効求人倍率は建築コースで59.4倍、都市環境



コースで32.9倍と就職希望者に対して景気の動向に左右されない高い求人倍率を維持している。また、高専本科卒業後に専攻科への進学や全国の国公立大学をはじめとする有力大学へ編入学する学生も4割程度おり、多様な進路を確保している。また、全国の高専の中でも有数の規模を誇る学寮を有し、約8割の学生が寮生活を送っていることもキャンパスライフをより豊かなものになっている。

### 毎年、「デザコン部」が建築甲子園に参加、部員が模型製作をサポート

建築甲子園へのエントリーは、例年「デザコン部」の部活動として取り組み、磯田倫花さん(当時3年生)の作品が、部員たちの支援もあり見事に優勝に輝いた。顧問の尾上亮介建設システム工学科教授は「実は彼女は1年生の時にも奨励賞を受賞しています。入学して建築もそれなりに学んでいましたが、さすがにいきなりの受賞には驚かされました」と当時を振り返る。デザコン部は建築甲子園だけではなく、



尾上亮介教授

全国の高専生が集うデザコンをはじめ大学や協会団体などが主催するコンペに幅広く参加している。誰がどのコンペにエントリーするかは部内で話し合っ決めて、個人またはグループで作品を仕上げている。今回の作品は磯田さん個人のエントリーだが、先輩のアドバイスや部員による模型制作のサポートなど磨き上げられた部活のシステムも大きく受賞に作用した。

### 手描きの独特のタッチが高く評価

優勝作品のテーマは「融解と浸透」。パネルに描かれた手描きの独特のタッチは審査員からも高い評価を受けた。敷地の選定も「極めてオーソドックス」(尾上教授)に磯田さんの居住地に近い福知山を選定し、身近なところから課題を探りテーマを設定した。「都市の中の建築、メガストラクチャーも大切ですが、世の中全体が集中から分散へ、SDGsに代表されるような持続可能性のあるまちづくりへとシフトしていく中で、地方の特性をどのように今後のまちづくりに生かしていくのか、テーマを決めていく中で特に地方に意識の高い高専生として、その辺りを彼女たちは考えていたのだと思います」と尾上教授は説明する。ガチガチの「ハコ物」の提案を求めない建築甲子園というコンペも、街路を地区センターの素材の一つに見立てる提案に一役買った。「融解と浸透」。このインパクトある言葉が出来上がった瞬間、「良い作



優勝作品 【融解と浸透】

品になるな」と尾上教授は直感的に思ったという。そもそも最初のダイアグラムはキューブの水が溶け出す様をまじに見立てるところから始めた。対象地域のジオラマ的な模型をつくり、それをiPad撮影。写真を画面上でトレースして街並みの骨格を作り出した。「最近のエスキスもiPadが主流です。手描きであることに変わりはありませんが、CADなどよりも風合いが良く、何度でも描き直しができるので、今やコンペには欠かせないアイテムになっています」と尾上教授。審査で高い評価を受けた色鉛筆風の表現は、手描きには違いないもののiPadを

駆使した作図で、これからもこうした描画がスタンダードになるようだ。

### 都市開発へのアンチテーゼ 地域が持つ力を復活

また、今回の作品は田舎で暮らす彼女たちならではの都市開発に対するアンチテーゼでもある。人口減少に加えて加速する高齢化。今や日本全体が抱える問題だが、地方都市は一層問題が深刻だ。少ない人数のなかでまちに活気を取り戻させるにはどうしたら良いか。その答え

の一つが「地域が持っている“力”を復活させ、その場を提供する」ことだった。もともと“市”をやっていた地区で、人々が集うポテンシャルはあったが、適当な場所がない。それを公共性のある街路に屋根をかけることで、多くの人々が色々な交流の出来るスペースに生まれ変わらせた。

言葉には力があり、「発想の源もそこにある」と尾上教授は力を込める。この作品を見た人たちが各々連想して徐々にまちづくりを広げていく。まさに溶け出した氷が水となり浸透するように、まちづくりも住民の主導で広がっていく。

それが今回の作品を創作した彼女たちの切なる願いだろう。

磯田さんは今年4月から4年に進級。高校生の年代から大学生の年代に入ってきた。「建築甲子園は高校生までが参加するコンペだったが、これから彼女は大学生がライバルになる。建築としてまだ肌感が足りない感じは否めず、もう少し深く建築を学ぶ必要があると思います。彼女には建築家としての可能性も感じるので、地方都市の問題意識を持ちつつ、建築をデザイン、磨き上げていって欲しいですね」とは尾上先生から彼女に贈るエールだ。



従来は地区センターに集約していた役割が溶融し、まち中に浸透していく

## 受賞した学生に聞きました

(学年は当時)

①この学校・学科を選んだ理由 ②参加作品についての思いやエピソード  
③担当教員はどんな先生 ④将来の夢や目標



**磯田倫花さん**  
いそだ・りんか  
3年

①私の住んでいる地域で災害が起こったことをきっかけに、建設に興味を持ちだし、土木と建築を両方学ぶことができる舞鶴高専を選びました。実際に入学してみて、学校生活は、学びたかったことを学ぶことができているので、舞鶴高専を選んでよかったと思っています。

②初めは1人で案を考え出し、カタチを作り出していく中で、手伝ってくれる人たちが

が増えていき、最終的にはたくさんの人たちと作り上げることができました。取り組んでいく中では、テストや課題と重なって精神的な面でも大変でしたが、そのときでも、まわりに支えてくれる人がいたからこそ完成させることができたのだと思います。手伝ってくださった人たちには本当に感謝しています。

③普段は優しく温厚ですが、建築のことに関しては、時に厳しく教えてくださる、最も尊敬している先生です。

④これからやりたいことを決めようとしている段階で、何も決まっていませんが、建築甲子園や学校で学んだことを生かして、社会役に立てるようなことがしたいです。そのために、さらに建築の勉強に励んでいきたいと思っています。

### サポートメンバー



**上村藍さん**  
かみむら・あい  
3年

①高校生の年齢から建設について専門的なことが学べる高専に魅力を感じたからです。高専の中で舞鶴高専を選んだ理由は、建築系だけでなく土木系についても学ぶことができ、幅広い知識を身につけることができると思ったからです。

②この作品を作った彼女は仲の良い友人で、何カ月も前から1人で作品に向き合う姿に「私にも何かできることはないか」と思い手伝い始めました。優勝とまちづくり委員会特別賞のW受賞をしたと聞いて、睡眠時間や遊ぶ時間を削ってがんばった彼女の努力は報われ、嬉しく思いました。

③どのアドバイスからも学

ぶことばかりで、尊敬の一言です。

④まだはっきりとした目標を決めていませんが、高専で学んだ知識を生かして世界に貢献していきたいと考えています。



**日下部元喜さん**  
くさかべ・もとぎ  
3年

①日本は災害が多く、その被害に見舞われる地域の映像をテレビでよく観ていました。私はその被害で困っている人を1人でも多く、建設の分野で携わり、助けたいと考えていたところ、舞鶴高専をみつけました。学校のパンフレットを見るとデザコン部の掲載が目にとまり、興味があったので、入学する前からこの部活に入ることは決めていました。

②私は所属する部門が違ったのですが、夏休み中に部内で行われた中間発表を拝見すると、一目みただけでも他の学生との作品のクオリティに差があり、とても真摯にこの課題に向き合っているのだと感じました。本選

提出間近には模型の手伝いをさせていただき、段々と作り上げられ、形になってく作品には驚きと同時に感動させられました。

③何か質問があれば真摯に向き合い応えてくださる先生です。4年の設計製図の授業では、課題に対するアドバイスを丁寧に教えてくださり、いつも驚かされます。

④建築のきっかけはここが



**高山絢成さん**  
たかやま・けんせい  
3年

①中学生の頃から「将来は建築士になって、人々の思いに残るような建物をデザインしたい」と考えていました。それを実現するひとつの選択肢として高専が挙がり、学費など総合的に見て、選びました。

②最初は競争相手という立場でしたが、彼女は、どの人よりも努力していること、また、その結果が作品からも強く感じることができ、周囲の人もそれを感じとったようで、いつのまにか自分をはじめ、先輩から部活の先生まで、たくさんの方が応援、手伝いをしていました。

③自分は考え込むと頭がとても硬くなるのですが、デザコンに向けた取り組みの

際、先生に相談していくと、わかりやすくアドバイスをしてくれました。しっかりと自分の案について考えてくれる、とっても頼りになる先生です！

④建築を通して人々の特別感や人々に向けた感性、メッセージを伝えられるような世界的に活躍する建築士になって、「どえらいもんを創ってやりたい」と思っています。